

# 「韻律理論についての一考察」

田 中 章

0. 本稿では、Kiparsky [5] の Metrical Rule (以降 MR とする) の修正案を提案し、Prosodic Rule (以降 PR とする) は、この MR の修正案があれば廃棄できることを示す。

## 1. Introduction

英語の詩脚には次の(1)―(7)のようなものがある。本稿では主として(1)の弱強格 (iambus), (6)の弱弱強格 (anapaest) を扱う。

(1) (iambic line)

To <sup>x</sup>bē or <sup>x</sup>nōt tō <sup>x</sup>bē : thāt is thē <sup>x</sup>quēstion. (*Ham.* III. i. 56)<sup>v</sup>

(2) (trochaic line)

Līfe is bŭt an <sup>x</sup>ēmp<sup>x</sup>t<sup>x</sup>y d<sup>x</sup>ream. (<sup>x</sup>“A Psalm of Life”)<sup>2</sup>

(3) spondee [┌┌] (4) pyrrhic [××] (5) dactyl [┌××] (6) anapaest [××┌] (7) bacchic [×┌┌]

2. Kiparsky [5:580, 581] は韻律論は次の4つの要素から成ると考えている。

(8) BASIC PATTERN

たとえば弱強五詩脚の basic pattern は 4 1 4 1 4 1 4 1 4 1 (4)<sup>3</sup>である。

(9) A set of METRICAL RULES

METRICAL RULE 1 (MR 1) : [1 stress] → [a stress]

METRICAL RULE 2 (MR 2):

$$[4 \text{ stress}] \rightarrow [\beta \text{ stress}] \text{ in env. } \begin{cases} \# \text{---} \# \text{ (a)} \\ \#_p \text{ [} \# \text{---} \text{] (b)} \end{cases}$$

$$(1 \leq \alpha, \beta \leq 4)$$

(a)は単音節条件 (monosyllable condition) とも呼ばれる<sup>4)</sup>。(b)の環境  $\#_p[\# \text{---}]$  は Kiparsky [5:581] の定義によれば  $\#_p[\# \text{---}]$  と  $[\#_p[\# \text{---}]$  の両方即ち、各々、行中の休止の後と行頭を表す。(8)の BASIC PATTERN に(9)の MR 1, 2 が適用されて派生韻律パターン (derived metrical pattern) が生成される。

(10) INDEX OF METRICAL TENSION<sup>5)</sup>

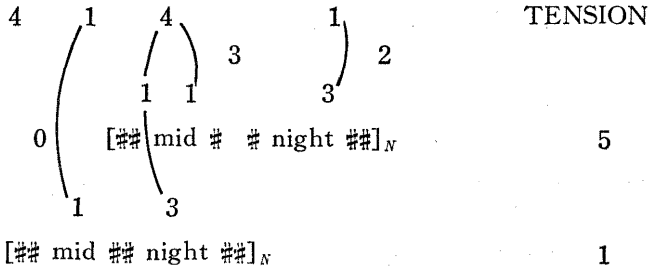
derived metrical pattern  $\phi_1, \dots, \phi_n$  と underlying metrical pattern (= basic pattern)  $\Psi_1, \dots, \Psi_n$  の間の metrical tension は各々の  $\phi_i$  と  $\Psi_i$  の間の相違点の合計である。

(11) PROSODIC RULE

個々の領域 ( $\#\#X\#\#$ ) ( $X$  は  $\#\#$  を含まない) における the strongest stress を除くすべての stress は無視せよ。

最初に(8)と(10)の検討から始めることにする。Kiparsky は(12)のような例を挙げている<sup>6)</sup>。

(12)

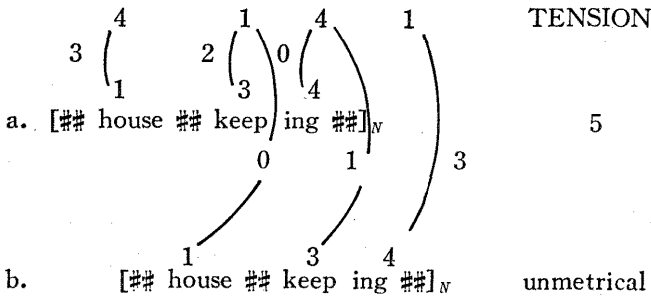


iambic line の strong-weak (even-odd) position における複合語 (com-

pound) は、ほぼ最低の tension 1 を生じるが、weak-strong (odd-even) position における複合語は、ほぼ最高の tension 5 を生じる。

次に(9)についてであるが、Kiparsky は三音節の複合語として次のような例を挙げている”。

(13)



a. においては、この複合語は weak-strong-weak position に生じている。house は(9)の MR2a によって許される。というのは house は単音節語であるからである。keep は MR 1 によって許される。なぜならば MR 1 には環境が指定されてなく、MR 1 はどこにでも適用されるからである。—ing は無強勢であるから全く問題なく weak position に適合すると Kiparsky は述べている。

次に(b)においては、この複合語は strong-weak-strong position に生じている。house は strong stress を持っているので strong position に直接に適合し、strong position にある —ing は MR 1 によって許される。しかし、keep は MR 2(a) にも MR 2(b) にも許されない。なぜなら、keep と ing の間には形式素境界 (+boundary) はあるが、語境界 (double cross boundary) がないから単音節語でないし、行頭にもなく、休止の後にもないからである。したがって b. は tension が 4 であるが unmetrical となる。

次に(11)の PR の働きをみることにする。

Kiparsky は maintain, conflict は各々, attain, modest と韻律的には同じことを PR で示している。そして次のような例をあげている。

(14) (=Kiparsky [5:597, Figure 4])

S	W	S
	3	1
	main	tain
1	3	
con	blict	

(14)においては main- も -flict も W position で stressed であり, 単音節語でないから(9)の MR 2(a) に違反する。したがって stress を付与されることはない。しかし, これらの語が実際に英詩で用いられていないかというところがでなく, 次のような例がある。(Cf. Kiparsky [6:(6) a, b])

(15)

I will | <sup>x</sup>main<sup>1</sup>tain | <sup>x</sup>it with | <sup>x</sup>some <sup>1</sup>lit<sup>x</sup>tle <sup>x</sup>cost (R 3. 1. 2. 259)

(16)

To note | <sup>x</sup>the <sup>1</sup>fight<sup>x</sup>ing <sup>x</sup>con<sup>1</sup>flict<sup>x</sup> of | <sup>x</sup>her <sup>1</sup>hue (Ven. 345)<sup>8)</sup>

したがって, PR で(15), (16)の main-, -flict の第3強勢を無視して unstressed に考えると各々, 第二詩脚, 第四詩脚が WS となり, (15), (16)が metrical であることを説明できることになる。

次に Kiparsky [5] は一見して(9)の MR 2(a) の反例となる次のような例をあげている。(Cf. Kiparsky [5:(33)–(35)])

(17)

He <sup>x</sup>in | <sup>x</sup>the <sup>1</sup>worst | <sup>1</sup>sense <sup>1</sup>con<sup>x</sup>strues<sup>x</sup> their | <sup>x</sup>denial<sup>(x)</sup> (Luc. 324)

(18)

Do I <sup>x</sup>en<sup>x</sup>vyy | <sup>x</sup>those <sup>1</sup>jack<sup>x</sup>s | <sup>x</sup>that <sup>1</sup>nim | <sup>x</sup>ble <sup>1</sup>leap (Son. 128)

(19)

In púr|suit óf|thé thín|g|shé wóuld|have stáy (Son. 143)

(17)–(19)はいずれも現代英語の発音だと弱の位置に stressed syllable がきていて、しかも単音節語ではないから(9)の MR 2(a) に違反するが、上の律読(scansion)のように Shakespeare 時代の発音<sup>9)</sup>で読むと違反はしない。なぜなら、たとえば、(17)の construes の cón- は(9)の MR 1 により許され、-strues は weak syllable であるから weak position に直接に適合するからと Kiparsky は説明する。<sup>x</sup>envy, púr|<sup>x</sup>suit についても同様である<sup>10)</sup>。

(17)–(19)までと同じような例がもう一つあげられている。

(20)

The pángs|of dés|pised love,|the láw's|delay (Ham. 3. 1. 73)

これは “Rhythm Rule”<sup>11)</sup>(以後 RR とする)の適用の範囲が現代英語のものとは違っている場合であると Kiparsky は述べているが、<sup>d</sup>espísed は注10でも述べたように Shakespeare 時代の発音であり、たまたま RR が適用された形になっているだけで RR とは irrelevant であると思われる。

次に、はっきりと(9)の MR 2(a) に対する反例である場合がある。

(21)

If fáith|fú|l|sóul|és|bé|á|lí|k|e|gló|ríf|íed (Holy sonnets, 8)

-like は weak position で stressed であり、単音節語でないので(9)の MR 2(a) に違反する。また、(11)の PR でも説明できない。なぜならば、-like の stress は alike の中の the strongest stress で無視できないからである。そこで(9)の MR 2(a) を次のように修正することを提案する。

(22) REVISED METRICAL RULE 2 (MR 2):

[4 stress] → [β stress] in env.  $\begin{cases} \#X-Y\#(a)^{12)} \\ \#_p[\#- (b) \end{cases}$

where X, Y do not contain #, but contain vowels from [4 stress] to [1 stress].

(22)によると(21)の *alike* は次のようになる。

(23)

# alike #  
X Y

したがって、*-like* は単音節語でないが、Revised MR 2(a) により weak position で stress を付与されることを許される。したがって(21)が metrical となることを説明できる。

ここで、(11)の PR と(9)の MR 2(a) の修正案である(22)の MR 2(a) を比較してみると(11)の PR は廃棄できることがわかる。なぜなら、たとえば、(15)において、<sup>x</sup>main- を(11)の PR で disregard することと、(22)の MR 2(a) で <sup>x</sup>main- を # maintain # のように考えて [4 stress] を付与し、WS (なぜならば第4 X Y 強勢は(8)の BASIC PATTERN によると弱音節となっているからである) とみなすことは同じ効果を持つからである。したがって(22)の MR 2(a) があれば(11)の PR は不要と思われる。

また、今までは二元の(即ち、弱と強から成る)詩脚について考えてきたが、今度は三元の詩について考えることにする。次のような例があげられている。

(24) (=Kiparsky [5:(84)])

And the <sup>x</sup>eyes | <sup>x</sup>of the <sup>x</sup>sleepers <sup>x</sup>wax'd <sup>x</sup>deadly <sup>x</sup>and <sup>x</sup>chill ("The Destruction of Sennacherib")

これは anapaestic line (cf. (6)) である。第三詩脚の weak position にある *wax'd* は -e- が省略されて単音節語となっているので(9)の MR 2(a) でも説明しようと思えば説明できる。それから、次のような例もあげられている。

(25) (=Kiparsky [5:(89)])

Oh, say, can you <sup>x</sup>see | <sup>x</sup>by the <sup>x</sup>dawn's | <sup>x</sup>early <sup>x</sup>light

Kiparsky は、もし、early を語末に stress のある二音節語でおきかえると非韻律的な(26)のようになり、実際ひどくまずく聞えると述べている。

(26)

\* Oh, say, can you see | by the dawn's | intense light

そして(25), (26)を説明するために、MR 2 に、もう一つ branch を付け加えている<sup>19)</sup>。

(27) METRICAL RULE 2d:

[4 stress] → [β stress] in env. — [4 stress]

Kiparsky は(25)は(27)の形にあてはまり韻律的であるが、(26)はあてはまっていないので非韻律的であると説明したいのであろうが、(27)では同じ anapaestic line であるが(26)とは違って単音節語(即ち, *wax'd*)を含んでいる(24)がなぜ韻律的となっているか説明できない。そこで(27)を次のように修正したい。

(28) REVISED METRICAL RULE 2d: [4 stress] → [β stress] in env.

{ — [4 stress] [1 stress] (i)

{ [4 stress] # X — Y # [1 stress] (ii)

(where X, Y do not contain # and vowels)

(28) (i)で(26)が韻律的であることを説明できる。また、(24)の第三詩脚においては *wax'd* が単音節語であるから # *wax'd* # と分析され、(ii)の形に合い met-

X Y

rical となるが、一方、(26)の最後の詩脚においては、*intense* が二音節語であるから # *intense* # と分析され、X が母音を含んでしまい、(ii)の形に合わない

X Y

ので unmetrical となることを正しく説明できる。それから、(28)(i), (ii)の形からわかるように(28)は anapaestic lines についての MR であるから、iambic lines には適用されないことは自明である。

### 3. 結論

Kiparsky [5] の(9)の Metrical Rule (MR) 2 (a) は修正が必要であることを示す例がいくつかでてきたので、(22)のように修正した方がよいと思われる。また、この修正案(22)の効果は(11)の PR の働きと重なるので PR は廃棄できる。同様に、anapaestic lines についての(27) Metrical Rule 2d も(28)のように修正した方がよいと思われる。

\* 本稿は、東北英文学会第36回大会(1981年10月3日、東北大学)での「韻律理論についてのいくつかの考察」と題した口頭発表の原稿の第Ⅳ節を加筆、修正したものである。学会での発表原稿を作成するに際しては桑原輝男先生(東北大学)から、また、本稿をまとめるにあたっては坂井重之先生(新潟大)、本山伸彦先生(新潟大)から多くの貴重な助言をいただいた。ここに記して深く感謝したい。

### 注

- 1) 弱音節が一つ余分な、いわゆる女性行末 (feminine ending) の例。
- 2) 弱音節が一つ欠けている、いわゆる行末欠節 (catalexis) の例。
- 3) Jespersen [4: 610] では、これとは逆に 1 4 1 4 1 4 1 4 1 4 (1) としている。
- 4) 正確には(a)は単音節条件ではない。なぜなら、(a)の環境 #—# は single word を表わしており、single word で二音節以上の語はたくさんあるからである。したがって、(a)は修正が必要なのであるが、修正案はあとで示すことにする。
- 5) この指数 (Index) は Halle & Keyser [2: 142] の metrical COMPLEXITY または TENSION に対応する。
- 6) これは Kiparsky [5: 586] の Figure 1. この例では弱強格から成る詩行(基本パターンは41)に <sup>1</sup>mid-<sup>3</sup>night という複合語が、弱強の位置に入る場合と、強弱の位置に入る場合との複雑さ (cf. 注5) の度合いを比較している。
- 7) これは Kiparsky [5: 589] の Figure 3.



- 8) 律読 (scansion) の記号 (x, ˘, |) は Kiparsky は書いてないが説明を容易にするために筆者が加えた。以下の例についても同様である。
- 9) construe, envy の発音については Kiparsky [5: 594] 参照のこと。
- 10) pursuit については Kökeritz [7] の Appendix 2 を, (20) の <sup>x</sup>despised については Schmidt [8] の Grammatical Observations を参照のこと。
- 11) RR は Kiparsky [5: 67] によれば次のような規則である。  
 [+ stress] → [2 stress] |—X [2 stress] Y [1 stress] where X, Y contain no 1 or 2 stress, and no <sub>p</sub> [(P=any phrase-level constituent)  
<sub>p</sub> は(9)の説明で述べたように #<sub>p</sub>[#— と [#<sub>p</sub>[#— の両方即ち行中の休止の後と行頭を表す。RR は、たとえば、次のように働く。 Tennessee Williams →  
 2 3 1 3 2 1 2 3 1 3 2 1 2 3  
 Tennessee Williams; sixteen tons → sixteen tons; unknown author → unknown  
 1  
 author また, [1 stress] 以外の stress は一つずつ自動的に reduced されることについては Kiparsky [S: 595, 注 8] 参照のこと。
- 12) この version の表し方については, Halle & Keyser [2] を参考にした。
- 13) Metrical Rule (MR 2 (c)) については別に問題がなかったので本稿では取り扱わなかった。

## 参 考 文 献

1. Craig, W. G. (1971). Shakespeare. *Complete Works*. London: Oxford University Press.
2. Halle, M. and & J. Keyser (1971a). *English Stress: Its Form, its Growth, and its Role in Verse*. New York: Harper and Row.
3. Harrison, G. B. (1970). *A Book of English Poetry*. Harmondsworth: Penguin Books Ltd.
4. Jespersen, O. (1933), "Notes on metre." Reprinted in his *Selected Writings* (1962) 647-76. London: Allen & Unwin.
5. Kiparsky, P. (1975), "Stress, Syntax, And Meter," *Lg* 51, 576-616.
6. \_\_\_\_\_ (1977), "The Rhythmic Structure of English Verse," *LI* 8,

189-247.

7. Kökeritz, H. (1953). *Shakespeare's Pronunciation*. New Haven and London : Yale University Press.
8. Schmidt, A. *Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary*. New York : Dover Publications, Inc.
9. 清水 護 (訳) (1977)。「(イエスベルセン著) 韻律論」(英語学ライブラリー(4))  
東京 : 研究社。
10. Williams, O. (1961). *The Golden Treasury*. New York : New American Library, Inc.